あそ丹名集

乾
坤

へ 5
1893

へ 5

京都帝国大学図書

西華集　乾

表合

目録

一この集つくしにて渓陽のひしみある時そ西華坊といひ難波の西にありし時を西華坊といふは西に東あれは二集ならぬ事華といひ西華をたつ華を集や乾やゑみ東西は二字のしなし篇乾坤をゑみ

門　へ　5
1893
巻

よ作の道と云事

一 懐紙にかきとむる部 わかちかゝさる ハ端書に

作者の名をかきつらね それより作者を

かき行ほと人の上下をわかんことなしや

一 この表に神祇あり 釈教あり 恋無常をえらふ

名所をいひ人名をいふは 一巻の鉢好を

家にはゝかりて出さゞるなるへし

一 此表に句類あらはす 一よりこゝにとむる ハ第一

いんをこいかむ 次にいかなる句面に工夫

その他句解とらんをみる人の一興なるへし

一 不易　流行　時宜　時節　時分

天相　観相　其人　其場

真草行　曲節地　起定転

右十八之表目者東華集ニ

有而格辨ニ而詠ニ不注之

一 この表そよめての御儀れてよ爲めあへにおか
くハ一紫をそらへ新とりよく今年
次めとえへハさ俳す八両聲から しかしんと
てなりの不ありなしれちかやかるれハ
人れころみそりてる意するにそれ才みかれ
やすし汁少へみそて世そ爲かさき のとさつてそ
このままし おかるや

坊

支考 撰

桜津

難波

おのれ花を月おとかさの山島
霊も借憶のめおふ河し
答先さとはも氣ぬ人の處遠きて
中西おの帰れれ河は
當清場の汁おさめれきて層
後れ猶り嵐 よもれ
在借も指さかりにぬれ茶
はれうさふきてさひおもとき

諷竹 天露 支考 芙雀 三惟 伽香 舎羅 沙長

第一
不易の真也されハこれの良師に月並
かくれのるやすくんば寄らん志ありて許可の宗匠とり
め称とも数の一字よりて一句を以て字をしうら
わしうる俳諧之法して新熟を於へつ作
附合やその比さ蛙の月かり附ちらん日むかし

第二
おうしかれハと称かされてまうし

第三
其人也まつり之馬買たすしつるへし一句の上後よの
つまれはてりよるとあつしれは後いかくれうつし姫に
ましう給ししみさやしまあらんとかりふまは芸を
ほまよ雛つくん

播磨

姫路

淋しうしちやうか蕣子れ一字咲　千山
萩ちゝよりつ姿笠藤の花の雨　亭風
道まえ花の洞なとかみらん　支考
友故たゆへん玉しんれは　全貞
しと豊花にし樹の影は宮の路ち　臨川
高浪れ葉の下れし山川　路正
風呂出る家独こ似たる二人連　太李
焼火の影も守れぬわし　葉底

第一　不易の真也体といふハちからを入れてはじめて目
にもおよばずしかりと云ふにも見えたる
せざる不易しくは

第二　其場也其人也といふ其のいふ事心をかくあさゆふの
往来よおもひぬ絵て物か箇のおもひ入れてまよ
ちからよりといへ哉ちらぬ所更に体しおありさ
おもしろきひやの(?)

第三　附味も秋也花の名をおもふこゝろの色を
とあられし絵に招て今の一句よと見て
せ志のそろし抱う経

全

猿吟て蔦も夜昼とも知らず　元澄
朝寒の日ざしに釈迦もゆる数　洛荻
夕顔の小家も今も鴻になりて　支考
何かと何を猿の吟覚　幸夕
衣の衢(ヒラ)の下て鎖しとけ汁　春草
山を拂ひし秋風ゝ吹　澄
水をも向ふ無花果(?)すゝ月の乳　荻
笠きて馬に乗りし我の身　寅

第一
流れ直也杖の跡も此まりしまかれしきんより
雲焔の生おも主こ漏さしよハ名れきのさり
しまりさをいはえいとし支枝のさきひよ
眼をなさこんや

第二
其日の天お也輝あくれの両悲しさに一樹数
のかりゑかとハ筆の縁のおし日託よりて雲
てまりしまのいさとれ雑またしりおきん

第三
曲也ときそし行山里の小家のかちまわおかりよ
夕りかのも此吹わらりさもまするより見即も
まるをしきそりや

後お

嵐山

旅人よおもき風の袂をかり　暁翠
月秋の傍にも月の別れを数　雲鼎
敲せてなけさ水鶏のとゞまりて　支考
一里境の暮れ　梅檀　梅林
罷出もれ螺旋の日の古石包　鶴白
清凉おも採ず今か　食時　翠
是此の躰さきの鈴ゑ　扶
風よ吹す鍋の始　白

第一 時鳥や市中にり卿の便とてもなといひ
迷ありといひとのつゝあまの食餉
にえりね

第二 其場やありふのり花よしむつひ露より
いつく涼き富もの花方わしてとまりき
勝しみ侍るうりと照れてさまとかむ句也

第三 国也ことしありふの水鶏と噂していふまで
をけくとふひすきるますてや

俳中

余興

篝もし俺をはれぬまたふれ　除風

伺楼の床れ河北蓑笠　漏角

賣ともれて瓢（ヒシリ）の筏をおもて　支考

秋の京の供北としお海河　我々

川むつひお襟の歌ときて月お　滓吉

しくよわびのさう高の菊麻　尚雲

燈台て旅まもりし風雅也　雲此

こちの名所のさい初浮北酒　青橘

第一　流行の第一也家ありしは今ありよかくらんとてはつるれ共揺る時の耀する所し見る所みしていとよし

第二　時分也とちぬさえ有り夜の体とかられ去今は西ろよ照りいるまで糧としのむかふらさの秋のさすよみ人かやし也

第三　去人の一轉也下司と人まれをしさるつて帖子の素襟もさやふみえしとふ常をさ一句かしみとなめうしろよのむおありのとむ今くるれりまれし買ひとるはおもれ何のおもさとぞつけし待えなるし

令

白妙や名も涼しきに風車　露堂

木末は蝉のこゑまで衣壇　素秋

旅人もしらぬ縫よるの外て　文考

団扇裏のちらに灰焼とみる　雅志

菖蒲のは挿よおかりし水の籠　枳邑

伯母のむかしは鴛鴦扇なり　如草

鳥来て酒のむ月はめでたしよ　蓑里

子猫の母よせての廣き新田　和水

才一
不易の行也夏の花のにほひのあるくさあらん
にふし流しとおりひよせ申そのうちにさしや

才二
夷場やきう花壇のきうさまま末の螢とて
ささきあはせさりさるのうちよくきうもまいて
御事の風情ちうらや

才三
甚人也一句のなか夜ならめききされとさるまた石壇
とこあさとくりみんあけ旅に旅人の茅の外の亦
又あまりしきうや畔のもりしとかへてくん
又いふるよ外の二句よ石壇よあさりてようらん
此行さしま新題とりとむまりしさり

安藤

秋泉

蓮池に吹ぬる風の薫哉　一雨
着も一夜に切麦の蕎　時習
あさ顔もうち○に庭の風情にて　支考
菊の降日に桃しりける　孤舟
猿らうむ野飼の牛の十あまる　雲飛
花りう○[illegible]旅の法僧　柳曙
あらし立しし雪の月に泊てき　一枝
雲の新れても鶴啼きり　如柳

第一　不易は真也吹ぬも風のと解御しる所より られたりしか之れ芭蕉のこころなるらんやうの 珍しい上の句風なるへし

第二　其場也　笑うも一段はとにかくなして切者の 凉しかさ着なおつかしか廣お事りさの ありさ名なりへし

第三　其人の一轄也路地のおもかげとちかく来たれ 走りかられ挨拶の花なるらん さしれも山下の文りしさいりて一句一りの其文 まおかれ百韻の名ここにつらね今日雅語とさ多 談なりす決まりしとみけるなりけり

仝

山陰きゝ前の花のゝ田植風　春草
色ふ味さてゐいぬ店の凉風　釣舟
かうへ生皆浙潜の名をきて　文寿
三日月の月の白月乃名　流水
膳海て湖水と濡れ積の色　似水
見る猫も嫐猫しある軍嫣　樗散
今の世も子抜も病よくなきて　雲鶴
来る積られきこえかしく紙　高吹

第一
不易なりや田植の比ぞそともよそさえんてさへ
まつ内との勝しさ行となかしひとうして
わしらん

第二
其場也観音坊也んなけりよ茶家の躰の事より
などの与るよ移人のさしさかゝさき小たりさ
万の盾と見るへし

第三
其人也宜躰のうらに川ありて我いうう会
のう来りりれを輕よりのほつて人をとて
一座又会ざいさかつ拿の事をれ様よ中うゑし
かれ為に有作治所ありんと見えまてかと
にたし

安藝

文鳴

春けや鳥のとゆけ子番船　尚政
日も馬鞍もを徹の夕晴　雲郊
也搾し宮小し庭前の子た掃れて　支考
懐ちょうて菱の九てもさし　林角
鳥の四なれて水れ渇りさり　祖扇
所あまよ答てれ物あ　境界　政
まま麻茶の有を行見の月を見て　角
名ををさ待しゝ秋来ちりたる　扇

第一 ある時はいやみなよにおかけといひきされぬへかの
馬おめるさらんと一百のわしらひれとうし

第二 天おや江辺の若さきうそれゆりておりしかうれ
頭よわりぬの分白の雲にとうれなうらん
れ見ハふえりわうゆのし

第三 甚人や先きさ比の曲ともいふさしらるゝの和高をと
見れ見人おもよもお[illegible]かしは微の[illegible]たかり
ゐしやらとて[illegible]ゐり[illegible]う[illegible]まゝ[illegible]
[illegible]も次の子に掃[illegible]されて記あわり小阪
[illegible]とハふしの[illegible]り[illegible]めして記わうり[illegible]
[illegible]のもうゆらて[illegible]やまのうゝぬおもされ

豊お

大橋

かりそれの世のならひや[illegible]に乱れけり　柳浦

しそのやしうき冬の明ぬれ　元翠

かの名の右京わたり月さえて　支考

[illegible]さむ[illegible]のおそしれ哉　一傀

さく雲に揺れ鳴やすらふつくし　雲鈴

ひとつおゝ来つきねよ名の所　不帶

如知の泉の〳〵汲(スイ)西方る　桐水

まちえこと酒よ十五日の金　野吹

才一

不易[illegible]やわらかに[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

才二

[illegible]やなの[illegible]あけぬと[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]

才三

[illegible]や曲せよ[illegible]
[illegible]にと[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

豊前

中津

蚊遣火の[illegible]の[illegible]姫の[illegible] 竿水

[illegible]の夕月に[illegible]のせむさく 万竹

[illegible]門も[illegible]酒さけて 支考

[illegible]鏡のとまる [illegible] 吐雲

夕月に[illegible] 竹

萩[illegible] 氷

梅の花[illegible] 雲

[illegible] [illegible]

廿一 不易の外や闇さき方ハ蚊の咎さとらし
しおも婦なるんとおりふて白ふ鼓の紐まし出さ
そのゆきしこそらるゆりしさえやり子まし

廿二 其人や蛙の[illegible]と出あれハそれ[illegible]わかれ
わすの[illegible]いりてふくさんとかねてんの姓
さと世限やさうふくそ

廿三 其場之比之かなお白寿を氣のつまりてさら
ゝのさとうひとさのひきるんとなしもうり
ふる世情也

豊後

日田

大名ハ笠[illegible]ひあり黒さり絵　朱褐
草ふ百合ほく山際の花　牝有
我とてそちいさん扇の団扇色　文考
淋しい時ハ芒の中ゆ鉋　芝角
精れ来て半夜大根の月色氣　恩信
渡の鳥みぬ静なりし　幽泉
[illegible]花の人会[illegible]秋の暮　豹蓮
蹴ての春[illegible]おりひ床　雲[illegible]

才一
流行の至也此所の人わすれ侘花をうらみ多くの
さへうしなひ下ゑいおもしろきものぞれいよろしく
わつらんや又追りしらさ成りとよし

才二
是場也はらみの山隊にて百人のむかれ候さらんを
異のなほくさるとて近所の見也句を作るの作
ありし市会吟ろとえりそ多し源しおさまり
かゝれわた

才三
行脚の紀れ也其ふさる御もろてしもりん早
百合の道のおちとし小やくてと行趣ろにと
何のつさらゐを泉花桐底の奥ゆんと更に时
みらんと紙んをとりいろ余情也
竹林の句いおのの自然な静寂けくし

全

秋の来ぬ枝のわちらもゑしれ家　里仙
露かららやらん雁のなそしくて　野和
何ゝ燭れ不帯音羅ね多して　支考
朝紀るにまらら　鋼ゟ　紫道
うおかゝにむろひをいのむ鳥　雨吟
役ゟの稿れ或しふゆまさるし　河推
ちりぬ月の陰とはし　秋のおもさき　呼丁
よの掃乃朝あそこの咲とも子風　若芝

第一

不易也と色枝のあらましと又枝やとあざむきて
きゝれてきえたのうつろひあしらひ風情
さくま寂寞より

第二

其場也世の中もやおもしろくありてかくら緒を
の涼しさま春白を織しら余情や四枯の
そゝさいそうむまりうん

第三

其人也胴をそしこれ風情よりの心の家
おしとはいあるなし慥のの世帯わかきん
に家移替ありしきまてうすらん慥の二字を
曲なして一轉せ

豊後

秋珠

跡むいて勝のれ坂北や百会は　投錐
日とゝろいはまり夕立の雲し　曲風
葛城の掃除に紅ねれもあるきて　支考
八百屋さまよりに浴衣の秋の　女霜
飛脚の面白さしに月の庵る　やまね
今前の家に迷に紫やし　可庭
さらしと月照やれ河の門　長湯
うれし十五夜に戸おらし初秋　蝶貞

才一

尓南れもの也正俳の里見為ハあまてて杖つく雲のあはれ法の坂ちるを云合ら下し主てし此中あらんすらん添と見ても主らんゆは西京夜桶氣私と本の露の下まりんあんし

才二

天お也坂とこれ思云といれ源しまでやれわつかやう也さらハ日記の其の心ぞするぞを哥の自の拿情ぞうくさまわり

才三

曲也ぞと掃除ハ日本とぞちらて西おののいとこ竹かんろへ打紙むかしかれも青葉と以れ茶情とひ不名月本ぞよらら一転のこころ

肥後

八代

烏子れ踏すりてや桐のむ　理曲

見ても来ぬ新田の家　寄亨

秋流よ浅瀬ねを落されて　支考

とし羽の風のちる啼ふて　舎蘭

守しと傘の汀ぞ会する　柳水

あふさま寺の与岸なるれ花　山卜

名桐なる花乳をとせ之称て　棣袍

日あるもてれかしの紅　林木

第一　不易也當座といふ事いと幸しき／＼　花の花咲ほこりて八相の　花をゆかしむといへる句也

第二　末場也けしき田舎に秋をとめていとこし家つくれ　独しる人世にしられたをうへしに荒くろミて　香る名のをとつらて雅かな風の比すへし

第三　其色衰へ八句まで世あまた帰る方の事をさす　歳よりの御きりその風りそてまたん曜相をそへつし　きよりと見えれ也おさ哉と思ふ也かれとり明し　を小りし風の八卦さしあすて何かなし　かきやら

肥後

作者

梅咲しや我ゆるあまる月の影　幻也

朴の葉露吹の風ありて鳴　谷吹

村しぐれ八重ふきて渡れ鴉　支考

春ゆかし山居眺もしら／＼　鶏吽

いつかまた御法の世と祈りて　雲蓁

まて秋のあとを知めてしまよ　龍子

雨はるるもの影をさして涼しく　金蝶

あらむかしのかはらぬ形　路吹

第一

石馬も真也とこそ月は月のおもしろきまゝここなれは
かねものしと枕にれさん知る也―路よ定れ所
のんびりとくわふさ―

第二

はそれ也と此比春よ文何とあてくれの花さらぬるし
傍らのしらてさびしとしるそう村の風情
るちる色し

第三

囲也ちてふつけの際る也いえとこそ蒙るのなるてたなり
わきしえ也ひれもしばみのしよ百孫のあま文あり村の為
みといへてもあおの也ほさまをハおの自よ對し―て
かくれ村の為のとのとなえてしハさとりふつて抱なり会

桐の葉は流れんよ墨くち翁子　挑亮

酒のみ様ころふきりの名は月　洞翠

萩なもはやぬ漆下枝さて　支考

ころもの縁も風より吹乾て　野風

秋川よれひろけまちぬ比ころ　路角

茶湖の芝加振へつよ似く　乎野

饅頭も名面とあつて花の君　濤也

丁寧に目鏡諸意也山　水流

才一

流行の真也物好の三翁に相の字ふさこりわいきて
一ならぬ世とえ?すとやれましける流行の作こさ
ありて翁恵といふ所を真也此さういふこれの
人此まゝふへ不一場也

才二

時ならぬ也んやきみ恵といふ所にえ人あ人あ
わらひわりて何とみく面白し─すりのつ百
といふ物好の余情や

才三

其場也おるの余情何とやらんけ酒もおもふし
のつんとて勝さし於るらく底ろろひさら
けしおもと翁くりのそれげんぢうきし─ 我恵東
忘かしもんまとひし─つる─

肥前

長崎

秋きんや朔日汐れ星志くき　卯七

はつ夜とし白松より猫の香　素行

焼捨の前にたき消し袖の露て　支考

白髪なきられ床の酒盃　雲鶴

又恵れ清の亀の塚のお　一好

橘れ花て持川さ　陶暁

芹の日和なりて味を薄紙　楓里

茶斗もれ産の春風　子流

第一

不易は真也何事も秋のさやうなるはあり移ゆく
景色のさまへくとして此句の風景見えて
やりさる風情也

第二

去情也野沢の田の畔にはつく秋の小稲の露に
そよふ気色かふきらしうに秋の景しみよ
とききかなり

第三

曲也翔るは八月をねらふる星やことのおなき
又さ〻也さ飛くとてさふ林かゝ人の姫輪の
許は月を籠るか句は也お句の心向を定めぬ
田舟と見ずしも此句の一興也いつてもて月を
めくるまとてかゝいひさんお句のうつろひ
深みる

一

全

蛛也は春の夜の影　鞠風
野はらの月よこ芒の小つ　逸雲
清らは所し秋の秋の空かな　支考
そこの名は味噌てきによる　舟白
雲も見えさすと思ひ乱れ　盤谷
みよとてあふ　元山
清くつれの朧夜のかの陰の雲　雪彩
咲あけれ勝の清かな　六出

第一 不易は真也良し意の作意とえらへしその
夜あらし見えてされより庭おの宿也

第二 去場也けり行の林しきに頃のおもさい鳴らに
つめてこのあらしけをのつらなきんとおし
そうりさら出不尾也

第三 去場の一般にして付られ也さらて鳴中れもなん
世とつるの尽し

極楽をいつこ花ありしおもかしに
枝葉ふさをてさらのみ云ふ所

一休和尚

筑前

博多

朝顔に露るをさせてや秋の空 舎路

歩みよ月の姿れ深草の 昌尚

静かにし所ちなつぬ恋をして 支考

こゝろざを軒に咲む春の金 雪舟

蓬莱福に晩日の光繕ひ 正風

顔紅しら花と見よさ春の 一知

さゝれ石に人ぬ傘掛おり 一風

団子てお手ふ庚申の宿 和水

第一 信りの行也名郡よ唐るとて凡そさうんハ秋名の
すうひしあつに祈ちへおの家く青柳ゆれて云
むすしおうさつよのときさせきらんハ云すち
ことゝおりひ也 秋也

第二 其傍也方を須賀のおかりとさけんをのをしぬれて
作あつしおうんよ闇よあさせてまひかりしおうん
あさし官人家のさうひよハちまきて御のとら
まの〇ひさら須んとこの世いさこゝろましまし

第三 曲也とにあまの一夜めちきりよ名やさゝね
人の落しぬれて夜盈の月ぬなすのあふれ
さうの志のぬれさぬいとおろへしたく源氏に
うつしとおりひよせさらのかなり

伊勢物語
昭よ中ともへて経とありて御身まさん
よりにしのやと宗さとしてせし

仝

秋風の須磨の葉みゆ飛の殻　嘯風
花ちるそふ里の　舎六
為月よ書し宗のおれなそそせて　支考
須まふとそいふ照りふそいふよ　自笑
松を枕丸さ?の松を伐たそ　東市
旅さねんれ村てらし哉　自来
しけ夜をさるしの〇ら身九なり　万鉄
有乃みふれおとえてぬさうり　西轍

第一　不易流行也体ハ物のすかたといふ事なれ
発句の作もせきや先かんと風雅の情を
作くらぬ様ミえや

第二　未満也其人理を先まもれんと手をさくへおもんはかり
御体の風情を句の中にさくめまなり

第三　其人の一趣や志にその理の風雅あるへしいはさて
此れもおさまりうつに西来禅の利慾もよ
ちのまうへし

誹諧

福園

一床のして面白し秋の暮　宗鵆
菊よ月のさしよ見れ　宗　爾氷
千代よりし野も嵐吹あれて　支考
さひしおへのかんしやうくり　桂舟
勝絶もさそしおのおつ喜も揚鶴　称來
いつの里よりも結 しけ重　雲非
照わる里ハはらし春かなり　野草
ちいさん家の其 こ こ女　元水

第一 不易の真也日ころの風よまひかして雲霞にとりてありしをそれすゝむを経すやありくひとあらはひらかへとよし

第二 其場也三日の月の句ハ前にかゝれたる月影の露のうへに時をいへるさまへまりてひとへにかくし

第三 附合也亦その時の流行すくて程時の三ケ月の里かくれなりのいひまあかんよりしたかへ家さき経てよりかみしられ

全

三日月もまだきえぬ一里　素計

風吹や頭巾に稲の時雨哉　連山

露にもれ村のこ会の後にて　支考

果までふ子どもいさみ　西雅

鶏の追あけて柱の上　江立

雨ぬ宮のかは蟆さき　柳川

何所ゆえれぬ日和の誘ぎて　不及

鳴して夏ぬ猫の氣つくた　三居春

第一 流行の真也当世のことわり三日月の新作沙汰
れ附きくゝりしとて[illegible]んといひなし
さらに一時の流行也

第二 其場也当世の人ならひといへば里ちうさわがり
也風吹すまあしといひて[illegible]の[illegible]しきをさゝめ
う[illegible]也

第三 其人の一〔?〕也里を味り[illegible]よそよりいゝて
かれもりかひたよかてせよる意のなれ
きもめきるらん

發句

黒谷

松虫の声ある松の[illegible]かな　汐路

何やら稲妻[illegible]白い[illegible]親　琴吹

此時を良選[illegible]紅葉　支考

礼の[illegible]山崎の[illegible]　雲紅

風さそふ日和あらかな[illegible]　帆柱

あなた見るを[illegible]の[illegible]　水颯

不記[illegible]とりさ不の[illegible]さり　一保

ころ[illegible]もちてもまゝ[illegible]　柳生

第一　不易の真也　風情のいさゝかもはなれて
一季の句ありといひ出すまゝにせん不易の象の不易を
風雅の好情といふなるべし

第二　末端也　端の種々なれは色々をさまざまおほき
作中端といふ事なりんと肖気にあらぬ
のしるべし

第三　其体一様也まし　四季の其の折の時に応
とみるべし

百人一首
さひしさに宿をたち出てなかむれは
いつくもおなし秋の夕くれ　良暹法師

豊前
小倉

松笠や小日向にこほる菊の花　有常
薄みに月かそよ風　松溪
野分吹くに芒つゝ秋の夜は宮　支考
全て痛からぬ傍の下帯　雨兆
浪泥に深の男はふところ　不磷
蕗よかりしさとりおもての鉤　玉龍
御の花よおのれの字さくら鈍云　溪
いつまてもしはし猿丸のかお　胡甫

第一
流行の字也囲は菊うゑと断わりけらんに松竹梅よ
そろりと背中をおさゆらへそとつゝゝしむ
ふるまひや此のえとをまうてあやうきかれ
いりてつハ

第二
其場也自然とそなえてたまさか居ると見るべし
花の月の月にてよまさんと夜の月のとがめん
またの錯綜の句なるらん

第三
其場の一転也居の字をさいらつこあらんとかかる○て
噺ともし其ちゝ也流ハ中れに勝しておも至る海
句中しめてをもしまおとゝねたり

長門
下関

新発公之事見えず家　流枝
花まよはの鶯磯は霧月　柳江
比林の名残と下の関に寝て　支考
抱て西へ流れる桑木の子すゞ　芦睡
そよかられ葛蕎の風は一声蝶　龍水
西てもへまてまりと　初鶴　味雲
うつ笑なし也鶯嘴は宮に倚り　理口
さする　の積て海丸帝人　据刄

第一　流行の事也あらゆる[illegible]まさしく[illegible]ものの情を知して[illegible]
[illegible]
第二　其場也[illegible]の其の様よりて[illegible]
[illegible]
第三　[illegible]の親也[illegible]
[illegible]

長谷雅

西華集　坤

發句

難波

諷竹

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

天蛍

朝露は萩のしなれる野なかな
しほりし鳥も眠れる夜なる
紙子のさえし男子の人を恋ふ
金持の家も焼は雲の火掃か

舎羅

鏡鉢をぬらし八朔や茄子の宿
おしくの名月の新茶かな

鶯の夢も見しは袂かな

三惟

名月も見しは露の月の露
秋の夜家の月も花の色
露に染る心は花も涼しかな
風や庭の月に見て有明御

菫雀

秋風の音は諸て刀目かれ

こゝろあさはまつてもつゝ梅柳

乕道

親は子の火打かはりや梅の春

川長

父御さへ銭荒にも世の月の豆名

姫路

千山

深しよに胡蝶しわたる志のしれ
桃ちる也雛の衣着たれ小さき比
江の背たれ千代乃屋敷わたりれ
きしの菜小刻也宇多御月お
春前の御日也春乃むかわり

元隆

若葉せし腰のうき思ひ出はやし
秋稲と重なりおちにしかは
麻の葉に積ふ行宗か火鉢は
行行ま節(ヲリヒ)もなりて田植られ
風ふけし娘の柳の初嫁ぞ
秋乃野に花の中なる文殊は

諦僧

実を枯て猿より蕀落さし
麦刈乃こゝも我八闇し演する

雪風

春の野は若葉の上の波よ節り
秋の夕れは雨を寄し月は
秋野をもえ名の宿は野菊は

菓厚

うきふにも田はりて蟬乃梅
樹ての九田面に砕(ツラ)れわしれ
晩さて稲採えり日暮れ

東寓

立とめて娘らつれし花の宴
唐土とふけて海辺の彼岸かな

丈右

緑雪乃野也露ようなれ春の旅
涼しさと薑に深くりさし清川
和乃もむにゝの明くれて東風
秋れのさむさと共に晴るれ

玲正

これ也光雪さあり綿綿ゝ雨
神のむ乃るにまいら隠るゝ

定當

蓮乃柄に蝉やわすれの露
拍子のしもとに露や茶弁当
涼風

降つゝの坊主とおもて蓑かくれ
蓑おしるそてうしろ髪の袖
倉夷

松ゆめてあをしくらに夕涼ミ
太鞁引日和や星のむしろかな

温川

杜若はけて明ぬあさのかれ
滝しきまぬか火のたえゝ夕けむ
元祢

おもしろきもゆる山の志きかな
錦木のひもあらしき小家かな
幸計

きのふに秋をまちぬ茄子かな

をのゝえに花とおりふてたら哉
光巌

村雨やおちらを郷に隠しる
夷情

秋風にはれ照れ道のすゝき
元随

鼻紙をあけていかほとぬれ
少年 信昌

朝きりにあらしのわたる宮柱
之仰

峠ぞや風も川流れ秋の色
流末

此中に猿の来て川のすゝむ
風声

畑うらや傍に鳥のねところ
洛荻

いそしさに時もしらぬや鍛冶か音
榛草

岡山

鎚鐺の解や鍛冶のむしも経
兀峯

船路乃軋轢なミ海に一葉舟
雲麻

硯の海よりみるや梅乃暮

咲けや松をこゝら露の秋

まふ乃菊ある力落葉の後風

ふるさとに月の光の稀風
雀白

宵闇や梅によそふる猫乃恋

猫のわるさやまめな妻の宿

家ありて光とおもし天の川

梅林

まだひけくさより新竹の箱
名月や得さ持ちぬ帆かけ船

念発

新郷の箱はひらや梅の舞

隣風

あまりの新よみだれてやあらしま

悼僧

残る菊の香深くも匂ふなり

青楮

吹く風や切籠も光さてまた

露ありて来たり雨の打来る

尚雪

笠合をかへし笠は水をそれ

冬枯の柳や雪にその姿　　露堂

伊勢路にまかりて法師西行谷に
おもひてむかしの閑寂をうらやむ

いとゆかし数れよまの衣かされ

別僧

残りけりあとは庵や茶碗五器　　素秋

炭やくや翁の家で梅咲し

蕎開けて見れおつさや麦なり　　素三

短きにあまれど雨夜すさまれける

名月に瞽女（ゴゼ）と茶てや手に琵琶　　漏角

人心四月わすれし萩の垣

稲の穂やんでひりれ鯵（アヂ）膾　　枳邑

思百合や帆柱にかゝる鶴の巣
龍打

水音の続かて擽ふ雲の夜ル
維志

白雲や見えてさゝる小角豆畑

ちらしとも帆よかゞ縫て見ル
簑里

ありきや何ぞて哀細工まで

煎ゑのあとに入る鍋の蓋日の亂
和水

烏帽子着て見る人のめての吉し杜若
我々

散かゝる花桜乃中の花桜の亂
素雪

ゆり秋や団扇とらふ木綿ぶり
幸舌

矢数

數寄を盡してや星の年の流 稚作

菓花に勝と床もし悪しけれ
僧 松堂

飛し好事に一ツの葉も
為りけりや時は薄きの祝ひれや
此絶ならて後見ゆるかり詞とや
翁のおもひをとへしき世也

菊畫詫の好未て梅乃葉 盃季

色かれ花あり残り姫をみてやり
僧 有谷

渋乃きを
意もとて

世乃風にあをりて寺の菓子は
我流儀の尾のままに織し被益
何紅

下結童し勝負ある夜の宿なれは

まとこ春蛙てゆかし　素篠

茶雹

いさよひそたる箒なりけり柳

秋風にさしむかうて萩散風

河龍

驚浪よきるめのとんや杜若

祚原

春竹

夜の郷さゐまての梅花わか風

水仙をみてみとられ中頻の礼

見知らぬ人も京まても繁柳

一雨

一日さんぬて似よの白牡丹

庵れ月人の見世なり雛くさ

山の色能よせる霧の風

牛飼の菊さて来れ枯野風

梅膳

あさ日や潤に音れ長くした

晴気より咲て散り行梅の花

流水

情てしまし淋し秋の暮

一笑

ほろしと茶のれに散葉迄

喜好

夕暮や松ゑに少し鳥の影

時習

若藤のちる所えれ淵りの風

和水

蝉鐘の音にやける樹下の風

秋水

雛けり隣の看まるに出てすゝ　一風

鈴らの花もはしく碧の花幕の風　一故

こらへても春図さえし　一唐

如柳

美しや俺に訓る墻の春

標敬

清ちよ花源も花や夕霞　似水

篠こゝや粘野の川も千本車　通仙

暮もはなさこゝろへもり雛祭　高吹

猫も毬帳とのそれ問うれ

廣澤

柳江

御所こゝに縁切尼や高桜

銅駒のかゝるまでもすゝし出つり

流鏑や楯の板れりし人

猪乃香や翁張しふ此業

旅人や須磨寺ゟ叢の宮

此所山下の庭にありて東山子の著名に見え玉へり

交野

尚政

亦駒飛こそあるまじや梅乃花

和の帆此ふもと流りける標

菜もそれや法隆の寺と此山の家

林角

比雛し乃人かとこゝや離れ牛

ゆかしきなましに野りも渚うう

餞別

夜乃霜のうちに明てかへりけれ
荒てよりあやや月見乃須磨のふ
風に紅の紅葉流れ葉あれ

祖扇

人を送る扇わすれし秋の露
人買れ船をむかふや隅田なる

下関

身を捨れ旅そこそふかし秋の暮

流枝

夕雲を春に高眼のなき涙

芦睦

白露やとことの欲も見はり
名月や鶴声も見えとこその船

此浦に船に虎凡のなつかしく　理口

備中

秋宿も明日苅麦の茂し　龍水

玉条のもしるしかゝみ迄て禮れし

小倉

山寺

ちらくと梅花色の湯られ　有嘴

凡のむさ未てや坊の接つむ

あらそひえそひやあそぶらくは

雨しの峯と鈎を附南のさし

大津　　元梁

はなのちれ花も山も月夜かな

奈良にて八重桜の折を贈られて
かの都の九重にまかれけるや

麻の葉や菜をもてつゝむ雪隠

涼風をうけ身に引まはり飛の鳥

名のりや御道人と連れらるゝ

間もなく雨の音降る林の雪

十月やとやうにおりて花林院

嬉しさや元旦の亡き梅花わるく

翁の忌日に[illegible]
名残の[illegible]のこゝろを

さくらの花をもて雪かな

柳浦

行年に服のよそ[illegible]花さかり

北の[illegible]かれん涼しき川

片睡む旅子おもへし菓纔さ

此筆を蓋のたまや秋すゝき
きく折にやりうさ身かへかん

市中にぬれ身つもる家もまれ
桐水

暮過て日酒気流るゝ山の水

念佛も霊ぬ被花の月あかり
一僕

蝙蝠のあられて庵の暮かゝれ

きれそふにまかり傍ら竹の秋
不帯

掃寄せてとけぬ文字の落葉かも
似仙

百姓の隣や萬歳も朝日よし
龍海

笛によせてはいえろまでも花の笑子
野吟

翔びとゝへ○ろもし水鏡のれ

椎田

あの中にくてあり〻む柳かな　孤鶴

足こなた段にかしやる揺蘭　一帆

菓子やりて雛の名よひ月の面　不礫

気比毎に何と乞食の夕涼

念仏や蝿うつ花のにぎはひ　秀閑

中津

歳暮の鳥鶴の手洗に乳家様　万艸

南天の実や尽り一雨　鶏作

朝寝し鶏隣の雞比鳴れ

竿水

別僧

世の中に小角豆もありなから

悼妻

冷ふて見る枕に若菜

幡竜

ちるとしれ柳の花のあらし哉

蜘蛛やおりて[illegible]汗拭

西鶴

白菊を飛月にの[illegible]

秋の一夜にかくしや[illegible]

雪の日や[illegible]

道利

[illegible]のあはれ[illegible]

眠山

伏見[illegible]の花

蛍狩や子を抱なから遊ふ程　湖汀

鵜飼の好もわかさる盃かな　吐雲

宇佐

まつ程て芽と見る櫻花の端　芦恵

日田

海山の遠きや離れ隣と酒　朱拙
湖と晴のあらしに田螺の水
蓮の香に眠息はかり涼しけれ
木の間に入月も流れの花ちらし
立向の陰もまたありてあれ
名月に知るよる雲の世しれ

秋雷の中て浄るや蟷螂の笠
三日月の仕舞ハさてこそ涼し哉

里仙

南紀の僧をとひ

梅ゟまさて苦みのあり新緑哉
秋晴や小風の吹て食の味
夏風やまさ見られぬ扉り哉

野紅

弄る丸ねよくうしろ影ほりけり

猿牛

新子のや朝日夕日と馬の上
男うしろ家て冷たる露風お悦ハ
涼しさや一枝つに蓮の中
見へれものにかさまとてさすや河鶴
登るる脇の萩のうろ野まさり哉

訪閑居

赤の字やうまとたとていみゝ亀
武蔵ゝ猿矢射のおしるの音

倫女

雛ちこそ為おすゝや娘のよ

姉の身まかりしをむけにて人のよとり
紅葉のうれおて猿しと

紅梅やうなし我執の色あし
魄となれせし気かとよ豆の[illegible]
下闇やさえしさまよふ蘇りつゝ

猫妻やうまり耳ちに於て眠る
里とうんにてそよ小荻よ小扇の
みるれかいさ海よなりわしの
人しにさおういくれぬ宮しさの

僧 宗道

麦の葉にたれや雲雀なきり哉
青剛のほにさうるもの柘榴の
芋の葉のおやりや窓に秋の風

むしーん
蝶の羽〇立ておもしめされも
傍 芝角
雪にちしまと見る小蝶かな
一葉よ言藏しらくのそれ
ちかとに咲き楽や行まこ
影それに西はましき陽炎
雑子それねて娘らしとろり露

掛毛も形仙かめて浄とかり
傍 愚信
傘もは虱ておつし百合の葉
瑠小末て蛇と長かりけ
山翔や猪ひとあらんともの花
雪原の六人のさらふる目
此頃ひとつけの句あしとさりしと序日
けむ蝿より京へくる三下の脇とるらん
世をまとけり句の句
初かし

稲葉

萬代の鳥とおもひしかれ
水鶏の音りや是は照射し
宮一日志らぬまでえひ隠の金

此絵は本の絵路とこけつかれこうつし此句
とあしてこうつこう今得さんとさけり[illegible]
間中は理つささるにやおもんみさ[illegible]
て殺都[illegible]んやおんはふるのものを
凡範にとさて志を得る

呼丁

三日月は夜にほのめく間に
涙の露夕露をしれ芝草に
山伏のひつさげ志ら卜派れ
門高き前よき瓢は中瓶に

若芝

東納

金魚のうりにもしる物の色
出る月のとこ浅くし荻原
荻けやるしよくる稲の雲
遠良

朧月むらの鴉は鴨りけれ
野のうしろけて月をかく小春
可暁

蓮は花かれしにかゝるる

速の葉に硯の水となりけり
西六

さつきは膝に家もしさ新葉に
時てきん涼まさる月や意る
沙趣

彦鍬と庵くとならし寺の雪
柴桁の峰に又あり日和の菊
也水

和布苅とろてらし磯のよる

少年 一六

是き此あとり柳や文の跡

獨有

めりし色や雨つふりけり山の晴

致珠

的亭や蹴さりして打萩の花

投雛

卯の花や宮より河の都鳥

夕和の河に妻つる蜷の角

辻堂にかより下りて子判

打杖をはちりてや雛に花

風や松の古木のるれ纏すれ

曲風

乙倉の荒れをうしの彼岸かな
花鳥の簾かけ渡しけり
ますらをや花見にいそぐ杖の花

鰍衆貞

蕉雨

桜花の葉の上を涼しかれ
夏雲や花さくとつげにけり

宣嵐

若杖の若て顔罗ふ花くれ
若言にさんとをいう萩花

長湖

ひりりや鍬さされつれにさんし
朝露れ小ゑ子孫ふ花も香持れ
語ら行や園行わらに朱花の花

雅謀

大人の席ごさにあやうる花

菖蒲をもたゞ皆引けり雨の庭
可庭

朝湖のかゞやきにむら雲流れ
跡無に浮御堂て花やかりけれ
女 紫泉

百合の葉うら片陰に薊かな
竿の影にとゞき落る桜かな
江風

追加

農家乃窓にしみゝか花の秋
亡人 長水

咲つゞしれ野柳に山桜さくら
破れ酒の升おち風の稲穂哉
似帆

壁の日も菫て涼し也斎の影

梅の方に子乃遠の柳かれ
江鴻

世を軽し夜は猿の枕かな
松風や柳も里も不二のゝ
暁砧

桜かも野径段桃の白うれ
藤の子や濡れしひの歎涙
東湖

夕晴に蛇ら川の水影かれ
めぐし来れ星の下の里松かれ
之由

むりしま枕やしはく振扇かれ
女西鶴

初かりやこゝ見れ雨もそゝそ
琴曲

雑さしとえ子ねて見ゝ玩ゆかれ

油布院

むかしにも二日灸れなかりけり　一蘭

川越に路ハしてかくれ子蒲哉　竹丸

小田村

翁にも袖ぬらしたる越れかな　一柳

羽箒よなかりせハ雛子の声

鶯のそれの餌入福竹の鐘　一通

けふ見ても聞けりまたやまたさくら

袖乃景や下こん人の客の紛　圓水

さ乃の影水新のいさらへ樒　立秋

涼しさは奥より今や船の窓
鉢の露まで親の背中はすゞしかな

八代

奥かくて宿あり梅花
茶筅の上まで森の神月の
夕涼の茶店ゆかりやあり田
露亭

理曲
瓦燗の下家涼しや株まとり
枝ちる蝉は羽音は風まで
一日の深きはや葉の杯
浮かしる蛍の柳の露は
上蝶の手細はくもし 藪竹
棟設
墓蔵につ待らん町の胡蝶かな

生壁に眉ときく鶉なりけり
秋霜を草葉に啄むあやかなれ
筆や泥くかわらうし泥の
柿の紅葉に荒神萩の尺越す
徹見
萩露るや篝序に梅の花
埒のしふやいろ路は鎧ひ
き毛りし木の葉ふと見え秀く来

山卜

菊やけを麦風鉄の紛船
地さしき出て今も□たの寺
林木
梅の花家こそ閑の下駕籠
あら風津玄見北国や吹あり
含蕉
玉柳に蛇あらむ竜ア□れ

膳浦にわたるの網を吹嶋に
浮浪に吹まて雲や稲架付
如柳

ことよりの光して夕へよ影に
辻蔵まろうきくこ去りぬ
重荷

法図や出現て湯れ春に
柳水

暮れて戸一双ののれん
水涌

秋の千種く様さしや石師
石亭

御神やと錦光花て清の声
其寛

菓のうや春艶にむかふ定ぬ

依水

秋やけふ隠君の縁に利らふ
孫川ゑそあさむしと秋衣　幻極

萩打やいくちもえ君ふる酒
施主てや十日に菓の可御兵　挽夷
萩の子山路しはの口すへし
昨わきよりにくめされトつの流

木曽ちや勝手まとさしに菊巻え
鱸の塩にしきよ初きくし　全瞻
解きるや茶碗にこそまそに筆
ありふ雨や花の名残にわびぬ　成也
爪のあや隔し鳴くき鳥の数
舩漕さ京まてきやきすのかる

龍千

とたしろをといふて橘の露

房ぬらしや紙燭のかに風の音

子をおもて芋焼侍にきく声涼し

一里松まてまつ秋風のあきひゞき

槐峠

夕ぐれ蝶のはかなや鵜の声

猫こゑのおもひつし　鵜籠

巳门

かり畑に馬見えてむれおもひ

笠ぬれて手ずれになる月

雪菜

まてまてや枕をかへて居の時

一葉ちる石燭して気扇かれ

谷吹

あし原に酔ひ人てかりかね

我庵や落葉をあてに冬籠

志計

十徳のよく似合ふ榾木かな

手取る打ち流に一葉かな

吟松

はなしと秋の扇やひきされ杖

六道の墓に手向の灯籠かな

少年
深水伴

子猫の縁やまはらちらりに夕涼

女の日さし燈地上のすゞみ

女
深水伴

立あてて手藁にとりん飛島

廿二舟

満汐に追持て来るすゞみ

一廿一

吾れ日に行ろ下詰の墨と橋の上

野帆

蚊遣火や糸瓜のさかり窓の前

水流

子燕の燕を待しよりて蓬風

亭川

燕の来れる舟をともしれ秋風

可渕

秋川に水を流して月見かな

随吃

花さかり楼や岩に苔の花

路角

せしもおれとし見えし月の雲

鴨風

落葉の流せて来る筧かな

洞翠

酒蔵や人を酔させ秋の暮

長崎

明石舟泊　卯七

潮なやみあけく松のかすみ
日暮りやたゞ狭みちのひて帆影
沿海やりきのけて春のくれ
大雪や里ぐ浪りすかぢまれ色
潮音おちや浪ちん人篝の雪

素打

山風寒さゝうへゆきを枯れ
桜の気や林とみ川おのしま
浪と流れ片よれ浪れしまれ
茶えんや暖簾にお浦の葉宿
待さ冬や番宿わちわれ葉をれ

一女

待そのわやかれらや　女武者

唐門や雲ふこもりて夕涼ミ
秋枯やさらに一きは月の雲
山ちさを小姓と麻にわけられ
子流
か酒蔵りの水はやさきの稲ふゞき
一示帯雪深き踏む庭の風
古明
気嫺にかてらふとすれ鳥の風

魯町

一 對僊
秋風やはやけ乃紙の松枯
我乳をゆまゐ乞よし田穂風
郷青
緋水
二日月にさえ行き庭やもえくらき
楓里

合歓や馬子の中の花盛りし月
廣女

雪に生れ雪より嬉し梅の花
田上尼

雪のんの中で生れ來の梅

へ毛端文通
如渡

ゆり出る雲の一字や宵の星
山細く消て見し松の林
六出

詠二山居一ヲ

梅も花咲あらと云松の奥
川ちしの梅ミ打落や枯けれ

博多

月一つハ正月きりの也あられ

嵩ほの摘や数ある小諸風　晴扇

膝抱て宮焼きもし秋の空　万俵

おきれも池に湯漬や蜆汁　杏鶴

一さ揃て菜買にけり菖蒲売

秋の暮ちよる月もしらぬ子　含六

待さりし朝は露やむらしの花

松涯や小僧ありてわとこ夜　昌尚

蕎やあまりさえに覗めぐるさ

乾あを膝よはふるし宿士の宿

行春の暮より日や水の池　一知

夜雲に追はれて？しかりかな　自笑

稲こきの後家は夜すがら道？風
言付を又おもひ出しの次第？　正風

気や菜に？しきありの中へ

竜？柿にちの中を？御風
柿の実にうれて見し帳の色　東有

福岡

草の葉に菁？菩？の花？
あ人？にきえつれて村？紅葉？　江之

庭掃てとる鈎なこの落葉かな　趣弁

印の糸や栗ひろひまん釣被娘

揚灯籠松よりこえの地らし　東宵

盆三日其八条通ちらし馬の尻　睡猫

すゝしさは酒のみぬ宵や松よかみ

二

鶴より先明て見む苫屋酒　連山

又来て見る花も尽く松竹梅　不及

尊弥や扇の春も北小芝原　元水

東雨見ぬ里の花晴や幽居　雨水

芦角
かゝり立焼野の雉子のなれかな
素六

思滄
一保
飛泉や山に住きて銀の声
涼しさは夜もすゝと笹乃小流

此比は素秋しき箱もあかりさらし
名月自隠の人むりてゆるめし
菜をも吾に立まれ桜の一葉かな
春乃草に雨夜押ゆる雨まかな
帆柱
夏の比の多羽の花立そし猿かれ
秋風に柳のよりの色とりなり
柳生
晴わけ菜の色見えゝまゝのあ東風

少年
孫之吹

うくやきえて逢見ん梅の舞
垣越やところゝとれの花
山川に渡るあゆや杖の原
水汲に八せうしき河や榜坊

水颯

ふやくや西北行燗の行あり
舟の華や往あらしけ琵琶鑑

萩原てまりとすやし麻様びられ
あのゝ花御旅なりん笠れ宮

湖明

紅梅の色には見さん雉子の紅
淀さすとさけて渡りし梅の花
かりがねや奥をうちし喜琴
御手折のえにの家にも新河見れ
山吹や杖とあそびら言水の聲

秋風やころのしれぬ[illegible]さとさぬ

関東の洋たゞとく切れ[illegible]のすき
[illegible]いうち[illegible]のさう[illegible]

蕎麦切にかすみのさとる[illegible]

金柑に[illegible]をあらしれ[illegible]

元禄己卯秋九月重陽日

竹人方梧子校合

発句終

餘興

蝙蝠も[illegible]無き鳥

此句をある僧の[illegible]やこ
[illegible]

去来

[illegible]

此句を[illegible]の[illegible]人[illegible]の[illegible]
人の[illegible]しし[illegible]

名月やそゞろに秋の都かな

此句は保昌か小庭藤の時の作也光るを先出て其に[illegible]し名月のなかめよき都に[illegible]ありしを見せんとやうに

鳥羽田につゝむ雲の雨

此句は鳥羽田の雲なりと見るなんきの白雨に名乃残し通るとめて発句の名月にされは小竹乃字のさもつてまうけ句よし[illegible]

春

梅さへん影てる月も手にたかし

手枕もさしも緒にむすぶ

鶯も長刀小脇に取されて

此句は梅の句あり或人曰其角か句に鶯やかくしまよわれは長刀といふは本歌なり宗曰鶯の花にちらぬ小歌ありて長刀にて梅のさしあるは其角か句いふ[illegible]鶯は長刀と只一日まはりにて作意をもつて其角か句小の字を

支考

蜂しうか、杉ハ氷芝の二字よどりわかち
或曰兩國にわり四季の句しるす所の句
その句ハあれあ人と申曰　体ふ似たるもの
杉ハ百五十句ほどりその内五三句の末ハ
申し語へあれなりぬ句と定て一句宇
わきりもわんけるハちよく一点をさう
句も又あるべし

京

蕣の露や露つるを鐘の嗅(カサ)
紙花子の命羽音ぐもれハ操

蓮烏丸　本よし新座掲綴格

此句よ趣向あり是を尾張のあり由よ頭し
例かふりし志賀小宝の○つる宝の伝る事の
つ○子をあけて置夢と語りの可や蓮藤
以ふへり候ひ二字詞を語りハ以ふとおり分
語りて示詞を語り伊勢ハ語りの可成慶さハ
けれやつるるかくハくえ立て産業の慶ふ
云ふふしおれし句任なるん百練乃体
蓮るの二字ハ語るけ去れさしめ伝る也
此言祇中ホふふ御細と成す林凡たし
此海おる子南天乃宗ふ候るるをあて
をせくと附句の迎れに属するも消
句しそうて古を示すよおりくれの種か伝
言乃えよくむけ成し和尾おほん人も
かりて三志ある好く蜂しうさし

秋

稲妻あかし深てはつあし野山に
猿猴乃手かいさなる犹て也草の月
狐ゆきておもしろし天さと花すゝき

付句ニ此御あつとみえて長崎の記照院ニ
あそひく葦川にて画の賛せらるの模様
ほきし此間給ひあつてその水際の
あさりニハ萩露の景さら猿さなあつまきぬ
ゆふ手ね秋の此し山中にヨハ給ひさゝ
さもめるとゝ入中りき猿やまのき夜也この

君わる秋やかさう猿ニハさらハ付かれ秋景
給ひし其猿ニさ也本中家本わしまくる也

冬

　某隠某著

煤掃もさふるきゝく紅梅有
煤つゝふるハ暮ふる鳥
ひかへその一ねあたゝめやある寒

下部は俳諧の善悪をいひて比なるへし行
まて母をはなれておのれか主君に忠あるに二章ハ
孫か善悪の願ひよりさむ詞あり
俳諧小段て俳諧か家の教なり好むあ秋
貧富はえし風流を以て親あんとなれし
其月の夜をかくりて秋の夕哉しかし中は行かば秋を恥

壽永や播も杉葉も秋の夕
寂れし此峰てや秋を涅槃像

京寺町二条上ル町
ゐつゝや庄兵衛板